

平成26年2月1日
目黒区立第八中学校
校長 飯野 博史

平成26年度 学校運営改善プラン

1 第三者評価の実施内容

(1) 第1回学校訪問 平成25年5月27日(月) 午前9時30分～午後4時

- ・学校説明
- ・校長、副校長、PTA役員からのヒアリング
- ・授業参観

(2) 第2回学校訪問 平成25年9月9日(月) 午前9時30分～午後4時

- ・学校評議員、主幹教諭、養護教諭からのヒアリング
- ・授業参観

2 評価者

帝京科学大学こども学部児童教育学科教授 小池 和夫

宇都宮海星女子学院中学校高等学校長 齋藤 直子

3 今後の取り組み

評価内容		○今後の具体的な取り組み
前年度の学校評価について	ア 四者による学校評価アンケート結果を踏まえた学校の自己評価の内容	○四者による評価の肯定的な評価についての経年比較を見ると、ほとんどの項目について昨年度を上回る評価となった。しかし、授業規律の面で肯定的な評価が保護者 56.6%、生徒 43.9%という極端に低い数値が出ている。授業改善はもちろんだが、きめ細かな生活指導・進路指導、学校行事・部活動の充実などあらゆる場面で生徒の自己肯定感を高め、生徒自らが落ち着いて学習に取り組もうという意欲を育てていくことが必要と考える。 ○思考力・判断力・表現力を育成するため、言語活動を充実させるとともに、毎時間のねらいを明確にする、見通しをもって学習に取り組む、振り返りをするなど、学校全体で組織的に授業改善に取り組み、学習の習慣化を図る
	イ 学校関係者評価結果に基づいた学校運営改善の計画内容	○教職員の評価では「安全・安心」「事件・事故の未然防止と対応」といった項目について、昨年度と比較して肯定的な評価が約 20ポイント下降した。夏季休業明けに情報の伝達・共有、生徒指導体制などについて見直しを図り、組織的な指導・対応をしていくことを確認した。また、保護者への連絡を徹底し協力を要請する、関係機関との連携を深めるなど、全校体制で取り組み始めたところである。来年度に向けて、さらに充実させていく。 ○「いじめアンケート」を実施したところ、昨年度は「いじめがある」と回答した生徒が全体の 12%に達した。道徳の授業を重視するとともに、命や人権について考える学習を意図的に実施したところ、今年度は5パーセントまで減少した。引き続き、全教育活動の中に人権教育を位置付け「思いやりの心」を育てていく。

学校評価結果を踏まえた学校運営の改善状況について	ア 教育課程の実施状況	○組織的な授業改善に向けて、改善の視点を教職員に示した。視点をもとに「授業観察メモ」を作成し、授業観察、指導に生かしている。来年度に向けて、さらに全校で取り組む授業改善策を考え、全校体制で授業力向上に取り組んでいく。 ○少人数授業、チームティーチングを充実させ、個に応じたきめ細かな指導に努めた。今後は習熟度別授業をさらに取り入れていく。 ○交流給食、生徒会活動を通じた交流、実技教科教員による授業などで、特別支援学級との交流・共同学習が一步前進した。
	イ 組織運営等の状況	○全教職員で生徒指導にあたる体制を確立した。課題のある生徒との関わりが深まり、生徒理解に基づいた指導が図られるようになった。さらに全校体制で生徒指導にあたっていく。 ○進路指導を教務部から独立させ、進路学習指導部として機能させた。進路に関する情報、進路学習に関する資料が集約されるようになった。計画的、意図的な進路指導の充実を図っていく。 ○企画会を通して、校長、副校長、主幹教諭といったラインを意識させ、組織的な学校運営組織として各主任に力を付けさせていく必要がある。
	ウ 家庭や地域との連携状況	○保護者に対して「親切、誠実、丁寧」な対応を心掛けた。しかし、連絡が徹底しないことがあり、信頼を大きく損ねることもあった。問題の早期発見・解決、家庭への連絡を再確認し、信頼関係を築いていく。 ○地域行事に生徒を積極的に参加させた。学校ではできない体験を通して自信をもたせるとともに、地域とのつながりも深まった。地域行事を年間行事に組み込み、さらに計画的に地域行事に参加させていく。
特記事項	・特色ある教育活動 ・特筆すべき優れた取組	○朝の読書、部活動、生徒会主催による特別支援学級との交流会、ボランティア活動、放課後学習教室などが軌道に乗ってきた。今年度、生徒の実態から人権について考える機会を設定した。人権啓発標語作り、人権講演会などを通して、「思いやりの心」が育った。今後、新たな特色として「人権教育」に取り組んでいく。 ○健康・安全に対する意識を高める。学年で駅伝に取り組み、体力向上や学級経営に生かす。給食指導を通して食に対する関心を高めていく。
	・学校間連携の状況	○小学6年生に対して、「授業体験、部活動体験」を行ったところ、中学校に対する理解が深まり好評であった。年2回、小中連携で教員同士がお互いの授業を見合い、交流を深めている。来年度は音楽科を中心に連携を行い、「歌声の響く八中校区」を目指す。 ○小・中連携の意義や重要性についてそれぞれの教職員同士が共通理解をもち、連携して育成する子ども像を明確にする。小・中それぞれにできることを考え実践していく。

第三者評価を受けて、学校として上記に取り組み、生徒、保護者、地域から信頼され、魅力ある学校づくりを推進していく。